

Eureka XII

六年制通信 No.2 令和6年4月12日(金)号

セレンディピティ

発意、これ、「はつい」と読みますか、それとも「ほつい」ですか。「発」を「ほつ」と読むのは仏教語でしょうかね。発心は「ほっしん」ですものね。発起人も「ほつ」ですが、これは仏教と関係あるのかな。発作はどうなのでしょう。興味のある人は調べてごらん。発意は「自分から進んで考えを出すこと」ですが、何をするにしても発意のある者が始めたことはうまくいくようです。それはそうですよね。誰に言われるでもなく自分から完成したい何事かを定め、それを目指して毎日仕事をする、その時間は本人にとって何よりも楽しいに違いないのですから。

以前紹介しましたが、日曜日の10時からNHKのBSで「舟を編む」が放映されています。これは発意に従って地道に仕事をしている人とその熱意に触れて自らも発意を持つようになった人たちの物語です。全10回。今週末は第9回の予定です。三浦しをんの『舟を編む』は本屋大賞受賞作で映画化もされアニメ化もされ、コミックにもなっています。そして今回初のドラマ化ですが、毎回非常に楽しく観ています。役者さんたちも素晴らしいのですが脚本がいいですね。映画のセリフもあちこちにちりばめてありますし、岸部みどりを主人公にした着眼点も、最初は違和感を覚えたのですがドラマが進行するにつれなるほどこれもありだと、むしろ肯定的に捉えています、というかはっきりこのドラマのファンになっています。

経営面から紙の辞書を廃止しようとする社長に、馬締光也たち辞書編集部員が何とか紙の有用性を認めさせようと悪戦苦闘する姿が最近の放送でありました。プレゼンに向かう馬締に西岡が言うセリフが映画にもあった、私の好きなセリフです。「心配するな。前にも言ったろ。馬締くらい真面目にやってりゃ何もかもうまくいくって」という言葉ですが、これ、本当にそうだと最近しみじみ思います。真面目にやっている人は、正確に言うと正しいことを真面目にやっている人のことですが、周囲を動かします。人は、やはり、不真面目な人間を信用しないのですね、きっと。そして、馬締たち編集部員たちは発意によって動いています。彼らを見ていると、目の前にどんな困難が来てもその発意を奪うことはできないということがよくわかります。羨ましくなりますね。紙の有用性の問題で「セレンディピティ」という言葉が出たので、紹介します。私にとっても大事な言葉なので。

語源辞典によると serendipity は1754年にできた語で、セイロン（今のスリランカ）を指すアラブ語から来ているらしい。ホレス・ウォルポール（Horace Walpole 1717-1797）がおとぎ話 *The Three Princes of Serendip*（セレンディップの三王子）

から作った語、つまり造語です。このおとぎ話の主人公たちは、探してもいない宝物を偶然に発見するわけで、serendipityは「偶然にいいものを発見すること、またその能力」という意味で使われるようになったのです。ちなみにホレスの父親はイギリスの初代首相ロバート・ウォルポールです。

紙の辞書を用いると、調べている見出し語以外のところが目に入り、何となく読んでしまい「思わぬ発見をする」ことがあります。私は多くあります。紙の辞書にはセレンディピティが溢れている、それが馬締たちの主張です。これはその通りですね。知らない語を調べておしまい、とはならないところが紙の辞書のいいところで、不便な点は多々あるもののセレンディピティの喜びは大きいと、私もそう思います。

前にも書きましたが、2022年の11月にニール先生から*A Serendipiter's Journey*を頂きました。ちょっと早いけど先生への誕生日プレゼントです、と。ずいぶん前にこの本が手に入らないかと相談したことがあって、ニール先生、そのことを覚えていてくれたのですね。面白いのですが俗語や古い表現ばかりで読み上げるのに苦労しました。11月11日に頂いて読了は11月30日となっています。校長室に置いてあるからよかった見においで。私はこの本を、半世紀前に天声人語を担当していた人の本で知りました。セレンディピティという語を見たり聞いたりすると、ニール先生の思い出が浮かんできます。そういう意味でも私にとって大切な言葉なのです。

今週のおすすめ

・夕木春央 『方舟』 (講談社)

アイデアの勝利。学生時代の友人7人とキノコ狩りに来て道に迷った親子3人が、かつてカルト教団が使っていた地下施設に入り込んでしまう。一夜を明かそうとするが地震が起きて出入りが岩で塞がれてしまう。水も入ってくる。恐らく一週間くらいで水没すると予測される。出入りを塞ぐ岩はカルト教団が万一警察などに入られた時に施設を隠すために用意してあったもので、階下にある巻き上げ機に繋がれている。ということは階下で誰かがそれを操作し、岩を一階下に落とすと上の階にいた者たちは出入り口から地上に上がれる。しかし巻き上げ機を操作した人は脱出できずに死んでしまう。一番下の階から非常口に繋がっているが既に水没し、しかもモニターを見ると出入口は無事だが非常口の地上付近は地震の影響か土砂に埋まっている。やはり岩を落とす役割を担う人は脱出できない。そんな極限状態で殺人が起こる。

当たり前だが犯人はこの中にいる。では脱出できずに死ぬべきはその犯人ではないか。というわけで犯人探しが始まる。すると第2の殺人が…。犯人はなぜ今こんな状況で犯行を重ねるのか。そして犯人は見つかるのか。みんなは脱出できるのか。

はい。ラスト10ページの衝撃をお楽しみください。実は文章もそうですが、設定とか人物描写とか突っ込みどころ満載なのですが、アイデアが秀逸なので成り立っている小説ですね。夕木さんには悪いのですが、私はこのアイデアを東野圭吾さんの文章で読みたかったな。もっと人物が生きていたのではないかなと思うので。

BGMは スピッツ の 空も飛べるはず でした…。